R・T

遍駆羽御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒ・Ｔ

【Ｎコード】
Ｎ５４２７Ｚ

【作者名】
遍駆羽御

【あらすじ】
人は自分たちに似せた人間を創るクローン技術により、従来直せなかった遺伝的な疾患等をパーツを交換することによって直せるようになった。まさに天国のような時代の到来だった。けれども、まだその技術は高額なものだった。
椿蒼は妹の椿未魅が選択肢の開けた選択ができるように、病気の妊娠中の母がよりよい治療を受けられるように自分は中学校を中退して働きに出ることにした（貧困層では大半がその道を歩む）。クローン技術を使ったクローン医療さえあれば、母は一瞬にして直る。

クローン技術さえ……あれば、自分が働かなくとも自分に似た人形が代わりに働いてくれる。そう思うと貧困層にあり、水面ぎりぎりの位置に生活する自分たちの身分が、自分たちの価値がとても、低いように思えた。上を見上げれば、ゴールデンロードを優雅に走る自動車の群れが成していた。どの自動車も趣味の悪い厚化粧をした車体をしている。同じ身分にある友人達が蒼を励ましても彼女の心の中にある自分の価値判断が決定されることなく、宙に浮いたままだった。清掃業のバイトから帰る途中……彼女は巷で流行っている切り裂き魔（生きていることの空しさからくる精神疾患が原因だとメディアでは叫ばれている）に襲われる。命からがら、逃げて気がついた時には見事な桜の大木の下で泣いていた。
ああ、何故、自分だけこんなにも苦しい想い、やるせない気持ちでいるのだろう、本当は……違うと自分を否定した時、
崖が目に移った。死のうと簡単に考え、吸い寄せられるように彼女は死を選んだ。

蒼が気がつくと豪華客船の船尾に寝かされていた。今にも死にそうな蒼に美麗な脚線美の持ち主である倉輿廻流はこう言い放った。
「気に入ったわ。悲壮な黒い瞳の中にある希望。そうよ、絶望の底に隠された財宝の如き希望。私、気に入ったものは手放せないのよ。産まれたからには全てを手にしてやる」
それは独り言のようだが、死にゆく蒼に対しての応援歌のようにも解釈できる。
死ぬんだと思った瞬間、蒼は初めて、自分を失いたくないと漠然と思った。あれ？　嫌いだったはずなのにと疑問を頭に思い浮かべ……死を迎えた。

――――人の存在は生の在処で決まるのではない。ただ、魂は意味を求めて、流転していく。その果てに……悟る。

プロローグ　生が脈動する瞬間

プロローグ　生が脈動する瞬間

＞diary＜

カビ臭い、湿った空気がここが開かずの間だった事を示す。少女はたった一つの窓から注ぐ光を頼りにして、古びた日記帳のページを捲る。

――私の世界はもうすぐ、消滅するでしょう。
誰かの犠牲によって世界は保たれるかもしれない。ですが、私はそれを望むことが如何に愚かな行為なのかを骨身に染みる程に知り尽くしているのです。
ですから、御願いです。
私と同じ道へと歩もうとする方が私の研究成果を盗む目的で、これに辿り着いたのならば是非とも読んで下さい。あなたが本当に望むものはここにあります。
違う道へと進む方がこれをお読みになるのでしたら、どうぞ……私の穢れた世界を笑ってやって下さい。
「多く望んではならない。全ての世界が小さな幸福に包まれますように」

倉輿廻流（くらこしめぐる）　遺書　２０（年代日付は真っ黒に近い赤い血で汚れていて判読不能）――

次のページを捲る役割を担っている右手が小刻みに震えた。その異様なメッセージを何度も見返しては、あれ？　と首を傾げる。倉輿廻流と薄汚れた紙の上で、異彩を放つそこだけ執圧の強い黒を確認した。表紙の名前が倉輿廻流となっている。ということは……間違えなく、倉輿廻流の遺書なのだ。少女の頭は混乱しそうになった。自分の知る倉輿廻流とこの倉輿廻流は同じ人物のはずだ。なんたって、廻流という名前自体が珍しい。

――二千年　八月八日　天気　晴れ

私の生活は退屈なもので終わるのだろうか？　自分の持病である心臓病に負けて、このまま……一夏の蝉のように道端に落っこちて、誰かに踏まれるだけに産まれてきたのだろうか？

嫌だ、嫌だ、嫌だ。まだ、死にたくない、死にたくない。

汗臭いパジャマの上から胸をぎゅっと、掴んだ。まだ、辛うじて心臓は波打っている。

耳には頭痛を催すくらいに酷い蝉の鳴き声が聞こえる。私と同年代の高学年の子達が虫取り網を無造作に振り回している元気な姿が目に映る。窓硝子越しからの景色は薄くフィルターが掛かっているような気がしてなんだか、消化不良だ。あの景色の中にいつか、戻ることが叶うのならば、私は蝉を含む生き物に優しくしようと思った。だって、彼らだって必死に生きているのだから。窓の向こうでは二人の少年が蝉を手掴みにして自分の釣果を自慢し合っていた。蝉は助けてくれ！　と叫び続けている。勝ち誇った笑いと敗北者の断末魔の声が混じり合って、私の心に嫌気の空気を運んでくる。それは生と死のコントラストだった。私は生を肯定できても、死を肯定できなかった。あまりにも身近なもので、その時も……段々と息苦しくなるを感じていた。

あまりの息苦しさに白いシーツを眺めながら、読書で世界の広さを創造するだけの十一歳の人生で私は完結するんだと涙を零した。

だが、神様はとことん、意地悪だった。薬を点滴で投与して、夕

方には容態が安定してしまった。今は、暗い闇の中で埃の被っていない天井を眺めている。四六時中、私は個室にいるので灯りが点いていないことを不審に思った看護婦が一度、様子を見に来て灯りを点けようとしたが私はそれを止めた。いずれ、この暗闇と親友にならなければならないのだから、光なんて必要ない。

パジャマのボタンを一つ、一つ外した。

指先に触れている肌色と、薄い桜色、これは私だ、私は在る。そう心臓は必死に叫んでいるが、私はお前を許せない。お前なんて死ねばいい。心臓を握りつぶそうとした。弱い私を殺そうとした。あまりの憎悪に見境がつかなくなっていたのかもしれない。だが、それは結果的には私に生の活力を与えてくれる切っ掛けへと導いてくれたのだ。怒りに任せてテーブルに乗っていた本や雑誌をぶちまけた。それを更に足蹴にしてやろうと思って下を向いた。その目に映ったのはページの捲れた一般大衆誌だった。大きな文字で未来特集パート二：クローンの可能性、未だ、ヒトゲノム解明出来ずと掲載されていた。クローン……つまり、それを使ってロボットのように悪いパーツと良いパーツとで交換すれば私は生きられる。そう、思った瞬間、既にやるべき事は頭に次々に浮かんできた。思考が溢れてくる、地下水脈のように……止め処なく。――

――二千年　九月一日　天気　雨

退院以来、遺伝子に関する様々な研究資料を可能な限り、取り寄せた。富裕層（ふゆうそう）の中でも名家に当たる倉輿家の力を使えば、資料集め等、造作もなかった。もはや、他の資料を読んでも似通った理論の多さにうんざりする程に私の知識は肥えてきた。

母さんが一体、動物を何匹、飼えば気が済むの？　と今日もうるさい。その質問に私は捨てられている動物が可哀相だから拾ったのと頭の馬鹿そうな緩い声で喋り、触るだけで病気が感染しそうな子猫を壊れ物でも触れるみたいに触ってみせる。それを見た娘に甘い母親は今回だけよと軽々しく許す。本音を内に秘めて、外面を良く

すれば大抵の事は上手く行く。私はそうほくそ笑みながら、エレベーターで自室へと向かい、鍵をかけた。直ぐさま、汚らしい子猫の首根っこを掴むと、他の動物達がいる檻へと放り投げた。みぃーと可愛らしく鳴いてもそこから出してやるつもりはない。だって、例外無しにこの動物達は私が永遠の命を手に入れる為の実験で死んでいくのだから下手な希望を与えても仕方がない。今日も死体の匂いがする。当初は気持ち悪いと感じ吐きそうになったが、今では慣れたものだ。

資料を読み、私独自の理論、研究事例をまとめるに連れて規模が大きくなる。子どものお小遣い程度では到底、成しえない事実が濃厚に見えてくる。

そうだ、親を殺して、財産を全部、自分のものにしてやろう。

自分の命と他人の命、比べるまでもなく、自分の命だ。自分が居なければ、世界は無いに等しいのだから。――

日記を丁寧に読み進めていた手を止めた。こんな自分勝手な発言ができる人物が自分の知る倉輿廻流であるはずがない。彼女は自分の大切な人を救ってくれたり、クローン達の保護に努める優秀な人物だ。口は悪いが、行動はとても優しい少女だ。

「違う。こんな猫ちゃんや犬ちゃんを殺してしまう残忍な人間じゃないもん。ねぇねぇや、貧乳のお姉ちゃんや、クローンのみんなや人間にまで優しくする倉輿様……が。そうだ、まだ続きがある。見定めてやる、こいつが偽物だって！」

はやる気持ちを抑えつつ、ページをゆっくりと捲る。

――二千年十一月二十日　天気　曇り

生憎、曇り模様になってしまったが、雨が降らなかっただけでも良しとしよう。ベストを望みすぎると最低限の目的すら果たせなくなるようなミスが起きてしまうのは往々にして考えられることだ。続きは、愛する母さんの誕生日会、もとい、両親の殺害が済み次第、

書こう。
やっと、死体の始末が完了した。やはり、自分の病弱ぶりはこの先、研究を続けていく上で弱点になりうる。事実、死体すらも満足に運べない。おかげでとんかつのように何切れかに分けなければ、薬品の中へと沈められなかった。今頃はもう、肉が分解している頃だろう。
両親は最後まで母さんの為に私が純粋に誕生日会を企画したと思って疑わなかった。私が調理した料理を一々、美味しいと感嘆しながら箸を動かしていた。変な感じがした。母さんはともかくとして、会社の付き合いで贅をこらした料理を食べている父さんが何故、そんなにも喜ぶのか。たかが黒こげになった部分が五十パーセントを占めるハンバーグ、揚げすぎの唐揚げ、唯一まともなサラダ、食欲を無くす今にも崩壊しそうな城のようなディテールのチョコケーキなのに……。
すぐに答えは出た。父さんは私の頭を撫でてからにこっと一度、微笑んだ。
「娘が作った物はなんだって美味しいのさ。こんな小さな頃から君を見守っている愛しい娘の成長が垣間見えて嬉しいよ」
と言って米粒大の輪っかを指先で示す。幾らなんでもそんなに小さかった頃は……あるか。母親の胎内にいた頃の私ならば。私は母から貰った身体を捨てようと考え、狂気の道へと進んでしまった。謝らないよ、母さん、父さん。私にはその資格すらもうないのだからね。
父さんは毒入りのワインを飲み、それとほぼ同時刻、母さんも疑いもせず、口に含んだ。そして、二人は苦しい声を上げる事もなく、白目を剥いて倒れた。私はただ、自分の作ったハンバーグを見つめていた。ハンバーグの焦げた部分がすっかり無くなっていた。
私はその意味が解り、何処まで娘の本性に気付かなかった父さんなのだろうか、と笑おうとした。だが、笑えなかった。実行した後に後悔したってもう既に遅い。自分の足はもう、狂気の大地に足を

着けている。
自分はこれからも心を殺して、自分の生の為に生きなければならない。――

やっぱり、違う。こんなに馬鹿な人が倉輿廻流であるはずがない。
確信を込めて少女はさらに読み進めようとしたが、本物の倉輿廻流が何をして来た人間なのかはクローン技術を確立した人物というくらいの情報と、ねぇねぇに話してもらった数々の話しか情報は無かった。
「あの時は、本当に落ち込んだよ、ねぇねぇ……」
まるで見てきたかのように椿未魅（つばきみみ）は目を瞑り、思い出す。

＞ｒｅａｌｉｔｙ＜

今日も労働して疲れた。そんな充実感とは別に自分の生きている意味を最近、ふとした瞬間に考えることがある。それは健全なことなのだろうか？　そう茫然と眺めている遺伝子組み替えで創られた十二月に咲く桜の大木に話しかけるなんてメルヘンな事をする程、子どもでも。生きているのだから仕方がないと溜息を一つ、吐いて忘れてしまう大人でもなかった。ただ、椿蒼（つばきあお）は立ち止まっても意味がないと漠然と思った。
見上げれば、遙か上空にある道――ゴールデンロードを疾走する車が眺められる。煌びやかな光は富を象徴しているように思えた。事実、ゴールデンロードを使用している人間は富裕層という階層に住む人間だ。そして、自分は富裕層より下に住んでいる貧民層（ひんみんそう）の人間だ。貧民層の人間は日本政府から見放されているので事実上、富裕層のあの神々しい光へと辿り着くことは叶わない。
俯いて自分の乾燥した両手を眺めた。また、帰ったら安物のクリームを塗っておかなければならない。そんな事で悲しくなるなんて

ない。ただ、何度、繰り返したとしてもあの頃の生活には戻れない。かつては優しい父親がいて、病弱な母親を助けていた。富裕層でも中流程度の家庭であった。それが変な正義を語るから政治を乱す反逆者として富裕層から追放されることになる。尤も、父親はそのまま、獄中で死んでしまったが。

二年前の冬に父親を連行していったまるで血の色のように赤いパトカーが空を悠々と飛翔している。椿蒼は無理矢理、その空車（くうしゃ）を睨み付けた。鏡でもあったのならば、自分でも可笑しいくらい真剣で、演技ベタな形相だっただろう。

桜の大木を今にも爪先に穴が開きそうなズタボロなスニーカーで蹴り飛ばした。

「クローン達も人間だ。彼らにも……人間らしい生活を送る権利を」

強風が吹けば、掻き消えてしまう声が白い息と一緒に勝手に咲きこぼれた。ぼやけた視線の先に鮮やかな桃色の花びらが風に遊ばれて、重力の支配を甘んじて受けながらも微笑んでいた。そんな寛容な偽桜の花びらを蒼は憎くて憎くて仕方がなかった。クローンはいるだけで人間達の労働する場所を奪い、富裕層の傲慢な人間達の命を繋ぐ道具になる。許せなかった。だが、許せないと思う感情も周囲の風景を見れば、自分はこんな哀れな場所にいるのだから仕方がないと諦めざるを得ない。

重い足を一歩、踏み出せば、整備の整っていない道路。その横側にはもう、地はなく、ほんの数百メートル先に海水の揺らめきを拝める。昔、日本はちゃんとした島国だったらしい。今は国土の十パーセントが本物の大地。後は人工的に創られたプレートや橋の上で人々は暮らしている。某国の実験中のミサイルが誤射により日本海に落ちて、日本の国土が大波に削り取られたらしい。らしい、というのはもう、二十年前の事であり、十五歳の蒼がこの目で観るはずのないものだからだ。歴史の教科書が正しければ、何百万人も家屋の下敷きになったり、波に攫われて死亡したそうだ。

「歴史の教科書か。あーあ！　明日の宿題やってないよ。今は何時

だ。何時！　えーと、午後十時です。今日も睡眠時間が削られていく」

そう騒々しく声を上げた。そうでもすれば、足音のように聞こえるかつ、かつ、という音もさほど、気にならなくなり、歴史の宿題で頭が一杯になるだろうと愚な思考を働かせてみた。

だが、そう聞こえるものはやはり、そう聞こえるものだ。

暫く、無言のまま、街のある方向へと歩を進める。未だ、自分を追いかけるような足音が聞こえる。これはまさかとは思うが、最近、巷を騒がしている連続殺人鬼なる人物ではないか。

いや、いや、そんな恐ろしいと必死に頭を何度も振った。振った際に戻ってくる左右の結わえた髪が頬に当たり、微妙にうざかった。

貧民層テレビ局各社では誰も外出したがらない午後十時頃に多くの被害者が襲われているという統計が出ている。さらにそのテレビに出演した犯罪心理学者の見解ではクローンが人間の労働力を奪い、リストラに誰もが脅かされる時代背景にストレスを溜めている人物の鬱憤晴らしの線が一番、考えられるでしょうと渋い表情で語っていた。隣で一緒にテレビを見ていた親友の早陸（はやおか）まみが蒼の肩を何度も叩くというよりも、殴ってからこう言った。

「大丈夫。あたしら、運動では二強でしょ。走れば追いつかないって、これ本当」

蒼は数日前の親友の軽い言葉に強く頷いた。一気に両足の回転を速くし、しっかりと地面を蹴る。後ろを振り向くと黒いジャージを着た中年の男性が包丁を手にして、追いかけてきた。さほど、狼狽した表情は見られない。むしろ、薬物でハイになっているような焦点の合わない目線が印象的な男だ。追いつかれたらめでたく、朝のニュースか、昼のニュースの料理の一品として並べられるであろう。勿論、名前は伏せられるであろうから、被害者は疎化（そか）中学校に通う十五歳の女子生徒になるだろう。もの凄く、嫌な展開だ。

走っている途中、転んで膝を擦り剥いた。起き上がろうとしたが動きを止めた。今更、必死に生きて何になるだろうか？　自分の可

能性なんて見えているだろう？　このまま、政府に認められない貧民層の住民として蟻みたいな生活が続いていくだけだ。何処まで行っても……きっと、そうだ。

妹、椿未魅の今朝の様子がふと、頭の中に雪崩れ込んできた。未魅はテーブルの上でお行儀悪いことに茶碗をお箸で叩いていた。そして、蒼におかずはまだ？　とやや、苛立った声で訪ねてきた。いつだってそうだ、傍若無人な態度を取っていながらも、いざとなれば甘えてくる妹だ。

不思議なことに先程までの諦めるという選択肢がとんでもなく、間違えに見えてきた。とにかく、走る。肌寒く感じていた冬限定の芯まで凍る記憶が感じなくなってきた。身体の隅々までぽかぽかと暖かい。

「個人的には薄暗いとこでマラソンの自主連なんてしたくなかったよ……」

半分、自分の不幸さを呪うように、半分、自分を鼓舞するようにそう呟いた。殺人鬼も余程、蒼を殺したいらしく、馬のような臭い……悪臭に決まっている息を吐いて、追いかけてくる。リズム狂いな足音からすると、殺人鬼も人の子のようだ。

やがて、後ろの音は聞こえなくなったが、気持ちが高ぶって足を止めようとしなかった。このまま、帰宅して妹の未魅や、母親に危害が加わることになったら……自分は生きていけない。だから、ここへ来てしまった。あの偽桜の影と自分の影を重ねる。

ちらちら、と雪が舞い降りた。その雪は蒼の心をも真っ白に染めた。

あの瞬間、このまま……自宅に帰る選択肢は自分にはなかったのか？　どうして、自分は生きていけないって考えた。解らない、解らないよ、そんなの！　頭を抱える。自分のふくらはぎまで伸びる後ろ髪が鬱陶しい。普段はそう思わない。だけど、髪だけではなく、自分も鬱陶しくなってきた。あ、そうか、自分はその為だけに生きているんだ。そして……その先に自分の未来はない。

妹の未魅が幸福になる為に清掃業のバイトをしている。予測だが、妹を大学まで行かせる為には今から自分が犠牲にならねばならない。それくらい、椿家は貧しい。病弱で妊娠している母親は働くことができない。蒼のバイト代も微々たるものだ。富裕層からの追放の際、辛うじて持ち出せた父親の財産の一部も底をつきそうだ。自分に残されたルートは犠牲ルートしか有り得ない。

魂が抜けたように幹へと背を寄せて、そのまま、背を滑らせる。殺人鬼に追いかけられた時よりもぞっとしている。偽物であるが美しい桜の木以外、剥き出しのパイプが目立つ自分のお尻を支えるプレートの上には堅い荒れた土、自動販売機、その横に缶が一杯詰まったゴミ箱しか無かった。おまけに、プレートに大きな裂け目ができている。おそらくは昨日の台風による影響だろう。

吸い寄せられるようにプレートにできた裂け目へと足を運んだ。その枠内には目一杯の闇に広がる薄い白光の行列が浮かんでいた。自分よりも美しい波だ。

もう、終わらせよう未来が地雷だらけの人生なんて自分はいらないから。

躊躇(ためら)うことなく、足を生から突き放した。死へと向かう瞬間、自分の身体から何かが擦り抜けて心が身軽になった。今は例えようのない死の恐怖しかない。その恐怖が絶頂を迎える瞬間、まだ産まれていないはずの妹――椿姫(つばきひめ)の笑顔が浮かんだ。彼女は蒼にこう喋りかけた。

「お姉ちゃん、遊ぼう。お外、雪が降ってるからすぐに雪合戦ができるね」

「うん、遊ぼう」

そう、蒼は言ったような気がした。遠くで何かと何かがぶつかる音がした。もの凄く痛いし、冷たい。それに何も見えない……。死って単調なんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5427z/

Ｒ・Ｔ

2011年12月18日10時51分発行